戦後80年 いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第11回 名古屋空襲を生き延びて(後編)

木野 登喜子(きの ときこ)さん 昭和11年生まれ

(前編は5月15日号で掲載)

昭和20年3月12日未明に愛知県の名古屋を襲った空襲をどうにか生き延びた私は、その日のうちに、名古屋から遠く離れた愛知県の一宮の農村部にある知り合いの家に預けられることになりました。

両親は自宅の焼け跡に戻り、小屋を建てて生活していましたが、都市部で生まれ育った私にとって、初めての田舎暮らしは何もかもが新鮮で、家族と離れてさみしいと思う暇もありませんでした。何といっても、うれしかったのは食べる物が身近にあったこと。遊んでいてお腹がすくと、畑の麦の穂を手でもんでから、口に含み、ガムのようにクチャクチャかんで食べました。今の人たちからしたら、そんなものを食べるのかと驚くかもしれませんが、当時の私たちにとってはごちそうだったのです。

逃れたはずの空に、再びB29が

ただ、危険な目にも遭いました。終戦の少し前、昭和20年7月の終わり頃でした。村の外れの小川で子どもたちだけで魚取りをしていると、上空を米軍の爆撃機B29が10機ほど飛んでいくのが見えました。恐らく、どこかで爆弾を落とした帰りだったのだと思います。米軍機が私たちの上を通り過ぎた後、背後で「シャバシャバシャバ…」と水音が聞こえたと思った瞬間、上級生が「逃げろ!」と叫びました。1機の米軍機が引き返してきて、私たちに向けて弾を撃ってきたのです。

がれきや灰と化した空襲後の名古屋(愛知・名古屋戦争に関する資料館提供)

私たちはとっさに、小川に架かった橋の下に逃げ込みました。ですが、ここも安全ではありません。米軍機がまた方向転換してこちらへ戻ってきたら、今度こそ私たちは撃たれてしまいます。

次の瞬間、上級生が今度は「桑畑へ逃げろ!」と叫びました。私たちはどこをどう走ったのか分かりませんが、とにかく小川の横にあった桑畑の中に逃げ込みました。すると、葉の茂った枝が、私たちの姿を米軍機から隠してくれたのです。

米軍機は桑畑の上をぐるぐる旋回していましたが、やがてどこかへ行ってしまいました。それからしばらくして、異変に気付いた村の大人たちが駆けつけて来るまで、私たちは桑の木の幹にしがみついてわんわん泣いていました。名古屋で経験した空襲の時は、空が大量の煙で覆われて何も見えなかったので、私はこの時初めて米軍機を間近に見ました。

80年経った今でもこの体験を思い出してしまいます。空襲の怖さ、爆弾を積んだB29がまとまって飛んで来る爆音や警報の音、燃えさかる炎の色や形、焼ける臭い、一気に広がる炎のごう音など、全身で感じたあの衝撃。今を生きる子どもたちには同じような体験をさせてはいけません。それは大人の責任でもあると思っています。平和を守るためならどんなことでもやります。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。

令和7年6月15日号　No.1533

成田市のホームページ
https://www.city.narita.chiba.jp

＊QRコードは㈱デンソーウェーブの登録商標です

＊本紙は6月5日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

先日、東京で開催された、のみの市に行ってきました。古本やアンティーク雑貨、手工芸品などが所狭しと並ぶ会場を歩いていると、オリジナルの巾着が作れるワークショップを発見。20種類以上ある絵柄の中から、私の好きなトリケラトプスのイラストと、数十種類のインクの中から色を選び、いざ素材に転写。出来上がった世界に一つだけの巾着を空に掲げ「これだ!」とつぶやき、満足感たっぷりに帰宅しました。

リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。

令和7年6月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地　電話0476-22-1111(大代表)